

2^{キロ}進んでリイフルという坂を下ると、ホロノタという名の岬^{みさき}に出ました。私たちはここで舟を呼び、向こう岸のベツバラに渡りました。

同行しているアイヌのイソラムがこの場所の出身で、今夜は彼の家に泊^{とど}まることにしました。隣^{となり}に住むヤエケマツ婆^{ばあ}さんが長い間病氣とのことで、たくさんの女性たちがお見舞いに集まっていました。その中のひとりに、ヘシルウタレという老女がいて、まじないで病を治す巫医^{ふい}でした。病氣の人があれば神に祈^{いの}りを捧^{たか}げ、薬などの指示もするのだといいます。

その祈^{いのり}祷^{とう}というのは、病人の枕元^{まくらもと}にチタラベというゴザ



チタラベ

無地のものは日常生活で、文様のあるものは儀式で使われる。公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構提供。



イナウ

アイヌ民族が神に捧げる木製の祭具。

を広げ、太刀^{たち}、短刀^{たんば}、刀^やのつば、矢筒^{やづつ}を飾^{かざ}り、イナウを立てて山海の神様に祈り、「どこそこの方角から、何々という薬草を摘^つんできて、薬にしなさい」とか、「この病人は治るかどうか」といった予言^{よげん}もするので、本州^{ほんしゅう}にいる祈^{いのり}祷^{とう}師^しと同じことです。また、ここよりも奥地では「待ち人が現れるのが遅いか早い^{おそいかはやい}か」や「行方^{ゆくえ}不明^{ふめい}の人がいる方角は」なども占うといえます。さまざま不思議な予言や儀式^{ぎし}を行うこともあるといい、宗谷^{そうや}の辺りではこういうことを「シノチ」と呼んでいました。さて、そのアイヌ伝来の薬草とそれぞれの効能^{こうのう}を少し紹介^{しょうかい}しましょう。まず、風邪^{かぜ}にはイブ